

## 12. 冷え・便秘を合併する排尿障害患者に対する 大建中湯の治療効果

信州大学医学部 泌尿器科

○皆川 倫範、西澤 理、野口 渉  
小川 輝之、横山 仁、市野 みどり  
栗崎 功己、加藤 晴朗、石塚 修

【諸言】過活動膀胱を中心に、排尿障害は著しくQOLを低下させる一方で、従来ある $\alpha$ ブロッカーや抗コリン薬での治療が奏功しない難治性排尿障害患者は少なくない。また、便秘を合併する排尿障害患者、あるいは冷えにより頻尿が増悪する患者は多く、その治療に難渋することが多い。排尿障害をもつ小児において、排便のコントロールは重要とされているが、成人での排便と排尿に関する報告は少ない。その点、大建中湯は便秘・冷えに効果がある。また、内臓血流の増加など、排尿障害治療にも効果が期待しうる基礎研究の結果が報告されている。従って、便秘や冷えが軽快することによる間接的な効果、あるいは内臓血流が増加することなどによる直接的な薬理効果により、大建中湯が排尿障害への治療的效果を有する可能性がある。今回我々は、大建中湯によって冷えあるいは便秘を加療された排尿障害患者の自覚症状および他覚所見がどのように変化したかを調査し、その有効性を評価した。

【対象】信州大学泌尿器科および関連施設の外来で、すでに排尿障害治療を受けているが十分に症状が緩和されない40歳以上の患者のうち、便秘あるいは冷えを合併する患者20名を対象とする。

【方法】排尿障害患者に対して大建中湯15g/日が開始された1か月後に、その前後比較を自覚症状スコア（国際前立腺症状スコア、過活動膀胱スコア）、他覚所見（尿流量検査、残尿測定）で評価を行った。

【結果】大建中湯の使用後、自覚症状スコア、他覚所見、ともに軽快した。

【結論】大建中湯は難治性排尿障害患者の自覚症状および他覚所見が軽快させた。本研究は後ろ向きの観察研究で、対象は少数である。しかしながら、冷え・便秘といった患者背景を考慮して大建中湯を用いることは、排尿障害の治療として有効な選択肢になりうると思われる。